

## 学 位 論 文 要 旨

氏 名 藤澤 薫里

題 目 ＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきに関する実践的仮説の生成

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

本研究は、体育授業における＜運動のつまずき（予兆）＞に限定し、これに気づくための十分条件と必要条件を実践的仮説として提示した。すなわち、十分条件としては「児童の運動感覚に根ざした実技能力」と「つまずき指導の予期図式」の能力といった実践的知識を、また必要条件としては教科内容に関する理論的知識、具体的には教材である「運動の構造的知識」、「運動のつまずきの類型に関する知識」、「効果的な指導プログラムに関する知識」といった理論的知識である。本研究は、この研究仮説の実践的適用性を検討することを目的とした。

第1章では、＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきとその手立てにおける必要条件と考えられる「運動教材に関する理論的知識」の働きを明らかにした。具体的には、見込みのある若手教師に「運動教材に関する理論的知識」を介し、＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきに及ぼす影響を検討した。その結果、＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきの個数は顕著に増加することが認められ、理論的知識を領解することの有用性と児童の運動感覚に根ざした実技能力の重要性が確かめられた。しかし一方で、児童の運動パフォーマンス（跳躍距離）を高めることはできなかった。このことは、教師の実践的知識としての「つまずき指導の予期図式」の形成がきわめて重要であることを示唆した。

第2章では、「新人教師群（教職経験年数4年～6年の教師3名）」と「一人前教師群（教職経験年数10年～12年の教師3名）」を対象に、＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきとその手立てにおける十分条件の主たる要件である「つまずき指導の予期図式」の存在と役割を実証した。その結果、一授業あたりの＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきの個数では、「一人前群」の教師と「新人群」の教師との間の有意差は20%水準にとどまった。しかしながら、単元経過に伴う＜運動のつまずき（予兆）＞の気づき個数は、「一人前群」の教師の方が「新人群」の教師に比して有意（ $P < 5\%$ ）に多い結果が認められた。さらに、「運動のつまずき調査票」に記述された手立てと実地指導との対応関係をみると、「新人群」の教師は＜運動のつまずき（予兆）＞に気づくと即座に直接的指導を行う「即時的で即興的な思考」による働きかけの強いことが、逆に「一人前群」の教師は＜運動のつまずき（予兆）＞に気づいても即座に直接的指導を行う場合とそうでない場合が同程度に発揮されていたことから、「即時的で即興的な思考」と「熟考的で反省的な思考」の2種類の思考による働きかけを行っていることが認められた。加えて、その記述内容より、「つまずき指導の予期図式」の役割として児童の学習状況や課題（めあて）に応じて、学習効率を高める指導を展開させたり、計画した指導プログラムを修正・変更させたりして、児童の学びに応ずる指導を可能にする作用が推察された。これより、「つまずき指導の予期図式」は、確かに存在していることが確かめられ、＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきとその手立ての十分条件になり得ることが明らかとなった。

第3章では、＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきに関する検討は教師の意思決定メカニズムの的確性の究明に深く関係すると考えられる立場から、学習成果である「態度得点」の高い教師群（3名）とそうでない教師群（3名）を対象に、＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきと手立てが学習者である児童の運動学習に及ぼす影響を検討した。

＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきに対する手立てと実地指導の対応関係を検討した結果、「実地指導との対応率」は、上位群の教師：45.8%（27個/59個）であり、下位群の教師：80.0%（16個/20個）であった。これは、第2章における「一人前群」の教師と「新人群」の教師とを比較した結果とまったく同様の結果であった。これより、上位群の教師は「即時的で即興的な思考」による直接的指導と「熟考的で反省的な思考」による間接的指導を使い分けていることが、下位群の教師は「即時的で即興的な思考」による直接的指導でしか対応できないことが確認された。その上で、教師からの直接的指導を受けたことを自覚している児童の割合（直接的指導の受容率）ならびに直接的指導により技能が伸びたことを自覚した児童の割合（直接的指導の自覚率）ともに、上位群の方が下位群に比して0.1%水準の有意差が認められた。また、＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきから実地に直接的指導を受けた児童の「受容率」および「自覚率」ともに上位群では約90%以上にあったが、下位群の「受容率」は約50%にとどまった。これより、上位群の教師は、＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきにより児童一人ひとりの運動学習に応じた指導・助言を展開させる働きを促進させていることが明らかとなった。

以上の結果より、＜運動のつまずき（予兆）＞の気づきに関する研究仮説、すなわち、運動教材に関する理論的知識（運動の構造的知識、運動のつまずきの類型に関する知識、効果的な指導プログラムに関する知識）を必要条件とし、「児童の運動感覚に根ざした実技能力」と「つまずき指導の予期図式」の能力といった実践的知識を十分条件とする仮説の実践的適用性の高いことが立証されたものと考えられた。併せて、教師の＜運動のつまずき（予兆）＞に気づく能力は、授業中の教師の意思決定メカニズムの的確性（児童に合った指導かどうか）を高めるものと考えられた。